

『海紅』（山崎聰第一句集）より

桃実る昼は灯ともるごとく寝る
ぶどう掌に余り一雷後の青空
陽に向ける銃口虻の笑い声
翅たたむことなし山蛾は風のいろ
朴散るや頭上げても夜の馬
厨より山頂がみえ星逢う夜
七月や風のまなこの宙返り
意志つねにもち落日の蟹の甲
蟹の脚蒼く裂きいくさある真昼
北へ発ち七月の川にある匂い

松村五月抄出